

## ロストフツエフ教授自傳

## 原 隨 園

現イェール大學教授ロストフツエフ氏が古代史研究家中の最高峯であることは今さら贅言を要しない。氏の研究はスキタイ、イラン民族の文化に就いての考古學的研究から、希臘・ローマの文獻的考古學的研究等各方面に亙り、その古代史的展望の廣汎なること、曾つてのエドワード・マイヤー氏を彷彿せしめるものがある。併しマイヤー氏に於いてはその大著「古代史」が示すやうに、古代東方から希臘史迄が體系化されたに終り、爾餘のヘレニズム時代、ローマ時代に就いては政治・經濟・精神文化の諸問題が漸次究明されてはみたけれども (Kleine Schrift. 參照) 未だ氏の「古代史」の如き體系をもつには至らなかつた。マイヤー氏に残されたヘレニズム研究、モンゼンに残されたローマ帝政期の研究が、古代史の世界史的把握を志す古代史家の主要テーマとなつたことは言ふ迄もない。

就中ヘレニズム研究はドロイゼンの政治史的研究ユリウス・ケールストの精神史的研究、或はブーセツト、ライツェンシュタイン、ダイスマン、フランツ・キューモン、ウエンドランド等の宗教史的研究が相ついで行はれ、その文化諸般の相貌が漸次

明確な輪廓を以て浮び上つて來た。氏のスキタイ研究とイラン研究も單なる考古學的特殊研究ではなく、この特殊研究を通して希臘・ローマの西方世界と古代東方世界との文化的交渉の存在を立證したものであつて、東部ヘレニズム世界に關する劃期的研究であつた。更にこのヘレニズム時代の主要な問題で而も未だ何人も容易に究明し得なかつたのはその經濟的考察であつた。希臘經濟に就いては、マイヤー以外に或はグロツツ、ギロ一、ハーゼブロック、フランコツテ等の努力によつて略我々はその發展の諸相を把握することが出來、ローマ經濟に就いてマルカルト、テニ・フランク、サルヴィオリ、そして名著「ローマ帝政時代の社會・經濟史」をものしたロストフツエフ氏等の努力によつてその發展の跡を辿ることが出来る。然るにヘレニズム時代の經濟は文獻的史料からは殆んど知るによしなく、完く考古學的遺物と今世紀になつて愈々多く出土する草紙文書に依らねばならない關係上、深い考古學的造詣とパピロロジーに就いての卓越した見識なくしては何人も研究し得ると言ふ問題ではなかつた。この古代經濟史上の一大空白を埋める者の出

現は、凡そ古代史の綜合把握を希ふ者にとつては待望久しい一事であつた。が今やこの待望してやまなかつた問題は、現在世界に於ける古代史家中屈指の權威ロストフツェフ氏によつて解決づけられるに至つたのであつて、氏の最近の著「ヘレニズム時代の社會・經濟史」三巻がこれである。既に一九一〇年に「ローマ農奴制の研究」に於いて、ローマ農奴制の源流をヘレニズム的エヂプトに求め、更に一九二二年には「紀元前三世紀のエヂプトに於ける大土地所有形態」を著すなど、ヘレニズムの經濟史は氏にとつて數十年の長い研究であり、今こゝに結實して三巻の大著となつたのである。氏が常に精密銳利な史料批判と解釋の生氣ある現代性を所有することは専門家の等しく推賞する所であつて、氏の學界に寄與した貢獻は絶大なるものがある。然るにも拘らず、これまで氏については、我國に十分知られてゐなかつた。現ポストン美術館囑託粟野頼之祐氏も之を遺憾として、舊臘歸朝に際し、エール大學教授朝河貫一氏の斡旋により、親しくその履歴と著書目録とを教授より入手して贈られた。今次に譯述するのがそれである。これによつて讀者は、氏の學的足跡のみならず氏の歴史に對する態度をも併せて知ることが出来ると思ふ。こゝに記して朝河教授及び特に粟野氏の厚意に深く感謝する次第である。

## 教授の自傳

私は一八七〇年十一月十日（昔風に言へば十月二十八

ロストフツェフ教授自傳（原）

日）にウオルヒニアのチトミイルと言ふ町に生れた。父はこの町の國立ヂムナジヤムの校長を勤めて居た。私は少年期と青年期の前半とを南ロシアのキエフで暮し、こゝの第一國立ヂムナジヤムで初等教育を受けた。それはまことに古風ではあつたが嚴格な學校であつた。私のカレッジ生活はこゝにあるキエフ大學の古典研究の一學生として始まる。所が一八九〇年に父がキエフから東ロシアの方へ轉任したので、私も當時ロシアの首府であつたセント・ピータースバーグへ移つた。こゝで古典研究二年の後卒業して、將來カレッジ教授を志す學生に與へられる獎學資金を得た。私は卒業後三年間セント・ピータースバーグにほど近い、離宮の在る、ツァルスコイ・エ・セロにゐて、こゝの國立ヂムナジヤムで希臘語とラテン語との教鞭を取りながら、學士試験の準備にいそしんだ。一八九五年にこの試験に合格してから、私は古典諸國在外研究の獎學資金を得た。私はトルコ・ギリシア・イタリア・フランス・オーストリア・スペイン・イギリス等々有益な研究に三年の月日を送りながら、學士論文と學位

論文とのために資料を蒐集した。一八九八年にはロシアへ歸國して教壇生活を始めた。セント・ピータースバーグ國立大學ではラテン語を、同市の私立女子専門學校ではローマ史を教えた。一九〇一年には學位を受け、セント・ピータースバーグ大學のラテン語教授に任命された。同時に私は上記の女子専門學校や他の高等學校程度の諸學校で教鞭をとつた。一九一六年にはロシア學士院會員に選ばれた。一八九八年から(第一次)ヨーロッパ戦争の始まるまでは、何時も私の研究生活を助けて呉れる妻と一緒に古代世界の各地を數回旅行した。一九一八年に、第二次ロシア革命後、私はロシアを去つたが、爾來一度もまだ祖國へ歸へつたことはない。一九一八年から一九二〇年迄、コルプス・クリステイ學校の給費研究生としてオックスフォードで暮した。一九二〇年に古代史の教授としてマデイソン、ウィスコンシンへ移つた。一九二五年にはマデイソンを去つて、古代史と考古學の正教授としてニューヘヴンに赴任した。一九三九年にはイエール大學の考古學研究長を拜命した。ロシア、イギ

リス、アメリカ等で活動してゐる間に、私は數々の名譽學位を得、又ヨーロッパ及びアメリカの多くの學士院や學會の會員に選ばれた。簡單ではあるが、以上がロシア、西ヨーロッパ及びアメリカに於ける私の經歷の主な點である。

(次に)私の學問上の發展の主要な道筋を概略述つてみよう。私は古典語學徒つまりギリシア語とラテン語の一學徒として教育もされ訓練もされた。私の古典世界に對する興味は父ゆづりのもので、父はラテン語の卓越した學徒であり先生であつた。又、私の知的背景は全く母の賜物である。母は私にとつて大切な先生であり指導者であつた。キエフとセント・ピータースバーグで教を受けたカレッヂの諸教授に、中にもチーリンスキ教授とコングゴフ教授とに負ふ所は大である。私はイー・ボルマンからラテン碑文學を、オー・ベンドルフから考古學を學んだウィンの短い一學期以外には、西歐の大學で研究したことはない。カレッヂの諸先生に負ふ所が多であつたこともさることながら、更に友人、同學、學生諸君に

は一入感謝してゐる。又セント・ピータースバーグの一群の學者即ちヤベレフ、スミルノフ、ツエレテリ、フルマコウスキ、フツシリエフ等や、外國で知遇を得た多くの古典文化研究者、ロシアとアメリカで教へた多數の學生諸君に一層深く感謝してゐる。これ等の人々と接してゐるうちに私は多大の靈感と激勵とを受けたのである。一々芳名を擧げることには許して戴かう。とても長い名簿になるから。

私の學生生活の進路は、妙な言ひ方ではあるが、青年時代に書いた二つの懸賞論文に豫兆されてゐる。その一はキエフでデムナジアムの最高學年の時に書いた「キエフ時代に於けるローマの屬州統治」といふ論文であり、今一つの論文はセント・ピータースバーグ大學で書いた「新發掘品によりて明かにされたポムペイに就いて」といふのである。この二つの論文は共に制度的事實、社會的經濟的生活、考古學等に重點を置いた古代史であつて、いづれも、それ等が古代史に關係する角度から見たものである。爾後の著作に於いて私はそれ等の各々に同じ程

の注意をはらつて來た。古代史の領域で、私の注意は主として經濟生活と社會生活に關聯する問題に集中されて來た。それは私が唯物史觀に立つといふのではない。それどころか、私の關心は社會・經濟史に對すると同様に、文明・藝術・宗教等の歴史にも深い興味を覺えてゐる。併し運命的本能的に私は社會生活と經濟生活とが歴史に於いてどういふ位置を占めるか又どう發展したかといふことを理解することに主力を注ぐにいたつた。

この研究領域に於いて私の最初の實質的な寄與は、古代國家に行はれた特異な秩序の研究、つまり收税人といふ私的な商賣人の援助によつて行はれた租稅徵收制の研究であつた。歴史のほんの一小部分を書いてみようといふ私の最初の試みは、先づローマ帝國にむけられ、その行政的社會的經濟的構造の一現象に捧げられたのである。局限された問題ではあるが、この問題は興味を喚ぶものであり又充分解決のつくものであつた。この問題を研究してゐるうちに、私は科學的歴史研究に就いての二三の根本原理を體得した。それは私の生涯を通じて私の

心の中に残るであらう。第一に社會經濟問題を歴史的發展的に研究することの必要であること、即ち、この問題を技巧的に「古物的な」孤立現象としてではなくて、古代世界全體の一般的發展の光に照らして研究することが必要であるといふことである。例へばローマ帝國はその特異な構造と發展とにも不拘、希臘世界の成果特にその「レニズム的」發展段階に於ける成果を無視しては理解されないのである。而も後者は又希臘都市國家と東方君主諸國との努力・失敗・成功を考へずしては理解されない。

第二には、古代生活のどの一端を研究するにしろ、それは事實の無味乾燥な集積の上にはなく、それ等事實の有機的關聯の上に基礎づけられねばならないといふことである。歴史は生活の一片であり、歴史家によつて研究されるどんな現象であつても、歴史家によつて眼前に見るが如くに表現されねばならない、言ひかへると、歴史家の前に理論的抽象としてではなくて、生活の一畫面として表はれねばならないのである。歴史家にとつて考古學が重要であるといふこと、又現象をそれ自身孤立し

たものとしてではなくて全體の部分として研究することが必要であることがこゝから言へるのである。

私の「ローマ帝政時代の土地貸與」と「鉛板研究」から「農奴制」へ、「農奴制」から「ローマ帝國の社會經濟史」へ「レニズム世界の社會經濟史」及び「古代世界史」に至る迄、種々な雜誌に掲載した數百の論考を通じて、私の指導的觀念と方法とは一貫して變つてゐない。それ等の研究は總て生活を直接に反映するものを中心とした根本史料、つまり金石文、草紙文書、考古學的遺物等の記録に礎づけられてゐるのである。

私の歴史研究に於いては、金石學、パピルス文書學及び文獻的史料の研究と相並んで、考古學が増々その役割の重要さを加へ初めた。私は先づ今尙私の愛好するポムペイの研究から手をつけた。それから次第に古代世界の他の領域に研究を擴大して行つたのである。一ロシア人であり且つ深く祖國を愛慕してゐる私は、自ら古典時代のロシア史に興味をもつた。私は南ロシアにある希臘諸都市の希臘的及び半希臘的家屋や墳墓の裝飾壁畫の研究か

ら手をつけた。それはボムペイとヘラクラネウムの研究をした私にはお馴染の研究題目であつた。(『南ロシアに於ける古代裝飾壁畫に就いて』一九一四年)。この研究をするかたはら、希臘の藝術と生活とが南ロシアでとつた特異な相貌についての理解を深めるために、南ロシアにある他の古物の精細な調査にのり出した。希臘的要素は私にとつて親しみ深いものであつた。けれども南ロシアは常にヨーロッパ的な面と東方的、といつても主としてイラン風な面の二つの面をもつてゐた。この二つの相貌を研究するには考古學的材料の徹底的究明なくしては全く不可能である。ロシア時代以前の南ロシアの歴史は復原し得るのであるが、併しそれは殆んど全く考古學的資料の援助とその解釋とのみによらねばならないし、又そうでなければ不可能である。壁畫から一般史へといふ風に、私の初期の南ロシア研究はその展望を擴大したが、その時にも私は上に述べた方法を探つたのである。その結果は數冊の著書と數百の論文となつてあらはれた。それ等の著書のうちで最もよく人に知られてゐるの

は一九二二年出版の「南ロシアに於けるイラン人と希臘人」と一九三二年出版の「スキタイ人とボスポラス」とである。

南ロシア史に於ける遊牧民的イラン的要素を研究してゐるうちに、私は遊牧民の世界とイラン的世界とを更に詳細に調査するやうになつた。遊牧民にとつても、又一部のイラン人にとつても、その藝術の特異な様式、所謂獸文は、彼等の生活や心情を知る上の一の主要な糸口をなしてゐるために、それは私の深く注意する題目となつた。この獸文を研究しながら、私はその南ロシア的及びイラン的な變異を考察しなければならなかつたばかりでなく、周・漢時代に於ける支那藝術の發展の上にも深く影響したといふことをも考へざるを得なかつた。この魅力ある而も重要な問題に就いては、私は數ヶの論文と二冊の書物を書いた。

遊牧民に就いての研究はこの位である。併し南ロシアの發展にも、又一般に古典的世界の發展にとつても、イラン諸國一般、特にベルシア帝國は、その展開の三期―

アケメニド、パルティア、サッサン王朝——に於いて、常に根柢的に重要であつた。この三期のうちで、現在もさうであるが、最も知られてゐなかつたのは中期つまりパルティア時代である。私は常にパルティアに鋭い關心を向けてゐた。だからして、イエール大學に奉職中、パルティア王國のマセドニア風セム風な都市——よく保存されたものは僅しかないのであるが——の一を徹底的に發掘する機會が與へられたといふことは幸福な合致であつた。

その都市はユーフラテス河に沿うたデュラ・エウロポスと言ふ。この小さな都市に於ける生活と文化は從來殆んど全く知られなかつた新藝術と新型の文化とを露呈した。新型といふのはイラン風に深く影響されたものである。デュラ探檢の報告——多數の論文と最近の拙著「デュラ・エウロポスとその藝術(一九三八年)——はパルティア帝國の構造と文化の錯綜した相貌に對する私の關心を示したものであり、又それと結びついた種々な問題への私の肉迫とを表明したのである。

上述のやうな略歴から知られるやうに、私の發展には

一種の筋が通つてゐる。一見すると私が曾て研究し今尙研究してゐる種々な領域は全く關聯のないばらばらのやうに見えるであらう。けれどもそれは表面だけのことである。私は學究生活の當初から、私の興味を惹いた諸問題を歴史的觀點から理解しようと努めたのであつて、この私の努力はまた必然的且有機的に一つの領域から他の領域へと私を導いて行つたのである。

(一九四〇年六月七日記)

### Books in English

1. A Large Estate in Egypt in the III<sup>d</sup> cent, B. C., 1922.
2. The Iranians and the Greeks in South Russia, 1922.
3. Social and Economic History of the Roman Empire, 1926.
4. A History of the Ancient World, vols. I and II, 1926 and 1927.
5. Inlaid Bronzes of the Han Dynasty in the Collection of C. T. Loo, 1927.
6. Mystic Italy, 1928.
7. The Animal Style in South Russia and China, Paris, 1929.

8. Seleucid Babylonia, Yale Classical Studies III, 1932.
9. The Caravan Cities, 1932.
10. Out of the Past of Greece and Rome, 1932.
11. Many Chapters in Cambridge Ancient History, vols. VII, VIII, IX, XI.
12. Excavations at Dura-Europos, vols. I-VIII, 1928-1938.
13. Dura and the Problem of Parthian Art. Yale Classical Studies V, 1935.
14. Proletarian Culture, London, 1919.
15. Dura-Europos on the Middle Euphrates and its Art, 1938.

### Books in German

16. Geschichte der Staatspacht in der römischen Kaiserzeit, 1901.
17. Die Römischen Bleitesserae, 1905.
18. Studien zur Geschichte des römischen Kolonates, 1910.
19. Die Hellenistisch-römische Architekturlandschaft, 1911.
20. Skythien und der Bosphorus, 1931.
21. Gesellschaft und Wirtschaft im römischen Kaiserreich, 1930.

22. Etude sur les plombs antiques. Bibliothèque Nationale. Cabinet des Médailles, Paris 1899.
  23. Le Centre de l'Asie, la Russie, la Chine et le Style Animal, 1929.
  24. Tableaux de la Vie Antiquie, 1936.
- ### Books in Italian
25. Storia Economica e Sociale dell'Impero Romano, 1932.
  26. Le città carovaniere, 1933.
  27. Ricostruzioni storiche greco-romane de scavi e documenti, 1935.

### Books in Russian

28. La Peinture Murale decorative en Russie Meridionale, vols. I et II, 1913.
29. Birth of the Roman Empire, 1915. (Nos. 2, 9, 10, 16, 17, 19 and 21 have been first published in Russian.)

### Books in Latin

30. Tesserarum plumbearum Urbis Romae et Suburbii Sylloge, 1900, with a Supplement published separately.
- In addition more than 1000 articles in various Reviews, Periodicals, and encyclopaedias.